

大腸用カプセル内視鏡導入

道内初 専門外来で来月検査開始

室蘭市の製鉄記念室蘭病院（足永武理事長、松木高雪病院長・三百四十七床）は、大腸用カプセル内視鏡を道内で初めて導入した。同検査は二十六年一月に保険収載されることが決まっております、十二月から専門外来で検査をスタートする。

通常の大腸検査は内視鏡スコープを肛門から挿入するため、精神的・肉体的な苦痛が伴う。これら課題を解消する大腸

用カプセル内視鏡の活用で、早期に大腸がんを発見し、治療を進めるのが狙いだ。

同病院は小腸用カプセル内視鏡を二十年二月に導入。日本カプセル内視鏡学会指導施設に認定され、小腸で実績を重ねてきた。

大腸用カプセル内視鏡は、直径十一ミリ、長さ三十一ミリのサイズで、二個（両端）の小型カメラ、バッテリー、LED光源

を装備。毎秒最高三十五枚のスピードで、腸管内を撮影し、記録装置に転送された画像を医師が読影し診断する。保険適用までの検査料は十万円（消費税別）に設定するという。

大腸がんの、道内がん部位別死亡者数の順位は、女性二位、男性三位と高く、増加傾向。肛門からのスコープ挿入は「恥ずかしい」「痛そうで怖い」などという声があ

った。

同学会指導医の前田征洋副院長は「飲むだけで検査ができ、簡便で低侵

襲。検査の選択肢が増えることを生かして、受診率を上げていきたい」と話している。